

平成25年度研究発表会のご案内



—研究主題—

豊かな「対話」で広がる創造的な学び（2年次）

期日 平成26年2月14日（金）

会場 熊本大学教育学部附属小学校

内容 各教科等の授業公開・分科会・シンポジウム

講師



あき た き よ み
秋田喜代美先生

東京大学大学院教育学研究科教授
博士（教育学）。東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。
日本保育学会会長。日本読書学会会長。世界授業研究学会(WALS)副会長。

著書：『授業研究と学習過程』（放送大学教育振興会）
『学びの心理学：授業をデザインする』（左右社）
『子どもをはぐくむ授業づくり』（岩波書店）

ホームページ <http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~elem/>

熊大附属小 検索

熊本大学教育学部附属小学校 研究だより VOL.37

発行日 平成25年9月24日

編集・発行 熊本大学教育学部附属小学校 〒860-0081 熊本市中央区京町本丁 5-12 TEL 096(356)2492 FAX 096(356)2499

VOL.37

平成 25年度 熊本大学教育学部附属小学校

附属小 研究だより



～研究主題～

豊かな「対話」で広がる創造的な学び(2年次)

ごあいさつ

子どもたちに、学ぶ喜びを味わわせたい。友達と学び合う中で、生きてはたらく本物の知識や技能を身に付けさせたい。その過程で論理的な思考力や表現力を高めたい。私達教師はそう願って、日々の教材研究や授業の準備に力を注いでいます。学習指導要領では、教科等の授業において言語活動を充実し、子どもの思考力・判断力・表現力を高めることを重点の一つにあげています。教育現場では、その視点から先生方が知恵を出し合い、授業改革に向けて真摯に向き合っています。ただ、指導者のイメージした子どもの姿を実現することはそう簡単ではありません。

本校でも目指す子どもの姿に近づくよう「対話」を重視し、子どもたちがお互いの考えを出し合い練り上げることを通して、思考力・判断力・表現力を高めたいと研究を進めています。そのために、「考えのもととなる事実やデータ（根拠）」、「事実やデータをどう解釈したのか（理由づけ）」、「その結果どのような考えに至ったのか（主張）」の意識化を大切にしています。「根拠—理由づけ—主張」から子どもの思考の道筋を探ることで、どんな事実に出会わせることが必要なのか、そのためには、単元構成や課題の質、教材教具、場の構成などはどうあるべきかを緻密に考えなければなりません。このことが、生きてはたらく力をつける授業改革につながると考えています。

平成26年2月14日（金）の研究発表会では、これまでの研究成果を子どもたちの姿や授業で具体的に示したいと研究を続けています。先生方にご参加いただき、授業改革に向けての方向性と具体的な方策を共有できることを願っています。

熊本大学教育学部附属小学校 副校長 志波 典明

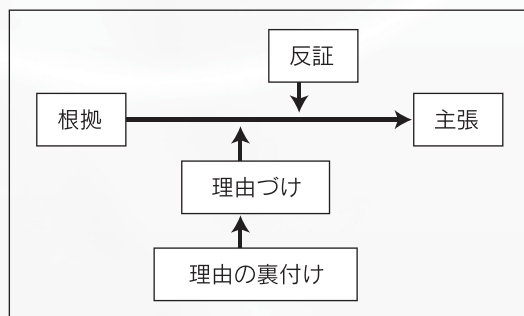
「対話型授業」を支える 論理的思考力・表現力



研究部長 井上 伸円

今、すべての教科等において言語活動をいかに充実させるかが課題になっています。しかし、子どもたちが他者との「対話」を通して自己の課題を見だし、思考を練り上げ、新たな知識・技能を獲得していくような授業を創っていくことは簡単なことではありません。子どもたちが活発に意見を出し合うものの、「何を学んだのか」が曖昧なまま授業が終わってしまうことはないでしょうか。

そこで、わたしたちは、授業の中で「何を根拠に」「どのような理由づけで」思考・判断しているのかを子どもたちに問いかけ、自分や相手の「論理」を意識させていくことを大切にしています。このことは、子どもたちが、対話の中で互いの考えに共通している点や違いに気づき、その妥当性を吟味することや、自分自身の考えの道筋を見直していくきっかけとなっていきます。その際、トウルミンが提唱した論理モデルの活用を行っています。（下図）



このような取り組みの中で、低学年に子どもたちが「どこからそう考えたの」と根拠を尋ね合う姿や中・高学年において「根拠は同じだけど理由が違って・・・」など、理由づけの質を検討し合う姿が多く見られるようになってきました。

本年度も、すべての教科等において論理的に思考し表現する子どもを育てていくことを目指しています。今後「どのような課題を設定すべきか」「どのような教師の手立てが必要か」など具体的な実践を発信していきます。多くの先生方にご意見をいただければ幸いです。

教科等 研究紹介

理 科



原口 淳一



岩永 聡



井上 竜作

観察・実験を充実させる言語活動を

言語活動の充実が叫ばれる中、理科では「話し合いばかりで観察・実験が軽視されている」という指摘をよく聞きます。

観察・実験の結果から考察し結論を導き出すには、話し合ったり文章にして考えを整理したりすることが必要です。しかし、その言語活動が観察・実験の結果を根拠としたものでなければ、学習したことの定着や理解の深まりは期待できません。

そこで、本校では根拠となる観察・実験の結果から理由付けし結論を導き出すという一方向の言語活動だけでなく、「直感的・断片的なことば」を取り上げ、観察・実験にもどのような「対話」を促しています。

家 庭 科



廣瀬 文子

「生活の場に生きる力」を育成する授業を！

「思ったより早く、簡単にできる」

忙しい朝は短い時間でみそ汁を作らなければなりません。試しの実習では、実に火が通っていない、時間がかかりすぎた等の課題が生まれてきました。そこで、「実の切り方や火が通る時間は？」「手順は？」等、解決の視点を明確にして追究する中で、状況に合った手順や方法を理解することができたのです。

本校家庭科では、こうした事実をもとに対話し、理由づけながら、様々な状況における問題を解決できるような題材構成を工夫することで、「生活の場に生きる力」を育てていきます。

国 語 科



下中 一平



坂崎慎太郎

生きて働くことばを育む国語科学習

文学的文章について一人一人の解釈がより深くより豊かになるためには、互いの解釈が何を根拠とし、どのような理由づけを行うことで導かれたものなのか、その解釈に至った筋道を明らかにし、互いの解釈を吟味し合っていくような授業が必要だと考えます。このような授業こそが、子どもたち一人一人の論理的思考を促し、解釈が深まっていくのです。

本年度も、昨年に引き続き、論理的思考を促しながら、一人一人の解釈を深めていく文学的文章の授業の在り方を追究していきます。

生 活 科



藤本 裕人

「おたずね」で気付きの質を高める

「おたずね」は、子ども自らが問いを立ち上げて追究していくための大切な交流活動です。なぜなら、「おたずね」により事実（根拠）を明確にとらえたり、事実と事実の関係性（理由づけ）に気付いたり、気付きに共通する見方・考え方をつないだりするからです。このような思考をする中で気付きの質は高められ、対象の本質に迫っていくのです。

そこで本校生活科では、相互に関係づけながら考えを整理していく教師の働きかけ方や、「おたずね」により自ら追究を深めていけるような単元構成の工夫等を提案していきます。

体 育 科



西村 正之



豊田誠一郎

子どもたちの運動の世界をより大きく広げるために

生涯にわたって運動に親しむためには、目の前の運動を楽しむように創意工夫する力が必要です。技能も楽しみ方も違う子どもたちが、関わりの中でその違いに気付き、運動を工夫していきます。

本校体育科では、子どもたち自身が、目の前の運動をより楽しむために「技能」を向上させたり「ルールや戦術」「場」を変化させたりしていく過程そのものを「学び」ととらえます。そして、運動の楽しみ方を根拠である事実をもとに検討し、理由づけし伝え合いながら、さらに運動の楽しさを広げていくような授業を目指していきます。

社 会 科



西澤 剛



牧野 敏治

社会的事象を多面的にとらえ意味づけする

既有知識や生活経験をもとに、社会的事象を自分なりにとらえる子どもたち。しかし、そのとらえは一面的であったり偏っていたりする場合が多いのです。

そんな子どもたちに、自分だけでは説明できない事実と出合わせることを大切にしています。そこで生まれた課題を解決するために、資料(根拠)をじっくり分析させて、事実と事実を比較・関連付けさせます。そのような学習の中で、うまく説明できないところや違う立場や観点から考えた子どもの発言などに着目し、互いの考えを伝え合いながら、社会的事象を多面的にとらえ、自分なりに意味づけする学習を目指します。

音 楽 科



合志るみ子



蒲池 悦子

曲の楽しさを味わうことができる子どもたちに

曲に出会った時の印象を子どもたちは、「楽しい感じ」「面白いかけられてこわい感じ」などと、感覚的な言葉で表現します。しかし、音楽の要素や仕組みとつなげて、どこからそう感じたのかを説明することはなかなかできません。

本校音楽科では、音源や楽譜を根拠にして、感じ取ったことと音楽の要素や仕組みを関係づけて理由づけし、曲の楽しさを味わうようにしています。そして、その働きやもたらす効果を理解した上で、自らの音楽表現に生かしていく子どもの姿を目指します。

道 徳



宮原 大輔

新しい自分と出会う道徳学習

本校道徳では、「登場人物の行為(根拠)や判断について考えてみたい」と思えるような資料(根拠)を選定し、活用していきます。そして、その行為(根拠)や判断について、自分の生活経験から思いを語り(理由づけ)、他者との対話を通して、新たな見方や考え方を獲得し再構成していくのです。

そのことにより、「『悪いことは悪い』と言ってくれるのが友達なんだ」と子どもたちが他者の考えを受け入れ、自分の判断を修正しながら道徳的価値をとらえ直していくことが可能となるのです。

算 数 科



余宮 忠義



水上 洋平



増藤 孝成

子どもたちの「なぜ」を追究する算数科学習

「正確な人数は32194人なのに、なぜ3万人なの」

甲子園観戦者を正確な人数でなく「3万人」と述べるAさんに、子どもたちは葛藤します。これは、子どもたちの概数の見方が「およその数は正確でない数」だからなのです。

本校算数科では、このような子どもたちの素朴な見方から生まれる「なぜ」を促す問題場面の開発を目指しています。その中で、事象（根拠）をじっくり見たり、事象と事象を関係付け（理由付け）たりしていくような言語活動を位置づけ、子どもたちの問題解決力の育成を図っていきます。

図画工作科



島崎桂一郎



北野 宏政

思いを生かした表現ができる子どもに

「楽しく遊んでいる様子を描いたけれどどうも伝わらない」作品制作の段階で、このような悩みをもつ子どもの声が聞かれることはないでしょうか。

子どもたちは、これまでの生活経験で形成されてきた造形的な見方にとらわれてしまい、新たな表現方法に向かうことに抵抗を感じる場合があります。

本校図画工作科では、思いに合った表現方法を選択していくために、作品である根拠を子どもたちが分析し、理由づけを対話しながら、色や形など造形要素の表現効果を感じ取り、表現につなげる授業づくりに挑戦しています。

外国語活動



前田 陽子

立ち止まることで気付く言葉の面白さ

「‘すまんのう’なのに、なぜ‘Thank you’なの？」

これは、日本の昔話を英語で留学生に伝えようとする中で生じたある子どもの疑問です。子どもたちは英語の言葉を単に鵜呑みにするのではなく、自分の体験を根拠に日本語と比較・類推し理由づけして考え、納得して使おうとしているのです。

そこで、本校の外国語活動では、子どもたちが経験や既有の知識を活用しながら、しつくりく言葉を探ろうとする姿を目指します。そのために、外国語で伝え合う中で生じる違和感や疑問に寄り添い、考えを出し合う場を設定していきます。